

# アリュートル語の名詞的接頭辞

永山 ゆかり ❖ 釧路公立大学

キーワード：チュクチ・カムチャッカ諸語、危機言語、シベリア、語形成、派生

## 1. はじめに

北東シベリアで話されているアリュートル語はチュクチ・カムチャッカ諸語に属し、同系の言語にはチュクチ語やコリヤーク語がある。

本稿<sup>1</sup>ではアリュートル語の名詞的意味をもつ拘束形態素について、語形成の観点からその特徴を検証する。以下2節ではまずアリュートル語文法の基本的な特徴について概観し、3節では複合語の、4節では抱合の特徴を述べ、次に5節では接辞による派生法の特徴を述べる。そして、6節では名詞的な意味をもつ拘束形態素のうちに、語彙化が進行したものと、まだ語幹としての特徴を保つものがあることを示し、これらの拘束形態素が名詞語幹と語彙的接辞との中間的な存在であることを主張する。

## 2. アリュートル語文法の基本情報

アリュートル語は二重標示型の言語であり、統語関係が名詞項と動詞の両方に標示される。たとえば、他動詞の動作主 (agent) は道具格で、他動詞の直接目的語 (patient) は絶対格で示される。他動詞には動作主および直接目的語を示す接辞が付加される。

以下に人称を表す接辞の例を示す<sup>2</sup>。

- (1) a. t-ə-laŋu-n 「私はそれを見つけた」  
1SG.A-E-see-3SG.P
- b. t-ə-laŋu-γət 「私はおまえを見つけた」  
1SG.A-E-see-2SG.P
- c. laŋu-nnə 「おまえはそれを見つけた」  
see-2SG.A > 3SG.P
- d. laŋu-nin 「彼／彼女はそれを見つけた」  
see-2SG.A > 3SG.P

- e. na-laʃu-n 「彼らはそれを見つけた」  
INV-see-3SG.P

主語と目的語を示す名詞は文の必須要素ではなく、すべての動詞は単独で節をなすことができる。次の例(2)は他動詞文で、主語の人称と数は動詞の接頭辞で表されているため、代名詞は省略されている。

- (2) ʄanək t-ə-laʃu-n nuta-lqən.  
there 1SG.A-E-see-3SG.P earth-ABS.SG  
「そこで私は陸地を見つけた」

語順は自由であり、SVO、SOV、OVSなどの語順が出現しうる。

- (3) seryej-nak t-ə-ramkisi-v-nin ʄavʃan.  
PSN-INS CAUS-E-visit-CAUS-3SG.A > 3SG.P wife(ABS.SG)  
S V O  
「セルゲイは妻を(妻の両親のもとへ)連れて行った」(Nagayama 2020)

- (4) ənʄin ənpəʄav-a nural ʄavəsqe iv-nina.  
that.3SG old.woman-INS quickly women(ABS) say-3SG.A > 3PL.P  
S O V  
「そのおばあさんは大急ぎで女たちに言った」(Nagayama 2015)

- (5) taq-u tu-ju-wwi ta-lʃaʃu-ʄ-ə-tkə-nina  
what-ABS.PL food-ABS.PL WANT-look-WANT-E-IPFV-3SG.A > 3PL.P  
O V  
keŋ-a.  
bear-INS  
S  
「クマは食べるものを探していた」(Nagayama 2015)

### 3. 複合語

複合による語幹合成はとくに複合名詞においてきわめて生産的である。動詞語幹と名詞語幹の複合は名詞語幹と名詞語幹の複合に比べると生産的ではなく、限られた動詞においてのみ可能である。下の例のように、複合語を形成する際は格や屈折接辞を除いた語幹だけがとりこまれる。

- (6) 名詞語幹＋名詞語幹  
 aŋqa-γərnik 「海獣」  
 sea-animal (aŋqa-n 'sea')
- (7) 動詞語幹＋名詞語幹  
 java-ɣətɬ- 「そり犬」  
 use-dog- (java-k 'to use')
- (8) 形容詞語幹＋名詞語幹  
 qiwwa-qaj-un'un'u 「不良少年」  
 bad-DIM-child (nə-qiwwa-qin 'bad')

上記のように、複合語の形成に際して、語幹は接辞を失うものの、もともとの語幹の形は保たれる。しかしいくつかの例外がある。例えば名詞語幹 *miməl* 「水」は複合語においては語頭の子音 *m* を失った *iməl-* という形式をとる。

動詞語幹と動詞語幹の複合は稀であり、とくに後部に出現しうる動詞の数は限定的である。形容詞語幹 *meŋ-* は名詞を修飾する場合には「大きい」という意味を表すが、動詞語幹についた場合は意味が転じ、「たくさん」という意味になる。

- (9) 動詞語幹＋動詞語幹  
 oji + ɣanqav- eat-stop- 「食べおえる」  
 tanŋo-viɣ- laugh-die- 「はげしく笑う」
- (10) 形容詞語幹＋動詞語幹  
 meŋ-ə-oji- big-E-eat- 「たくさん食べる」  
 mal-ə-svi- good-E-cut- 「細かく刻む」

動詞語幹に名詞語幹がとりこまれる抱合はチュクチ・カムチャッカ諸語で広く見られる。抱合については次節で述べる。

#### 4. 抱合

アリユートル語の抱合は次にあげる Dunn によるチュクチ語の抱合の分類と合致する。

- (i) noun (S) + intransitive verb → zero intransitive (no S argument)  
 (ii) noun (S) + intransitive verb → intransitive verb (new S argument)  
 (iii) noun (O) + transitive verb → intransitive verb (A → S)

- (iv) noun (O) + transitive verb → transitive verb (new O argument)  
(Dunn 1999: 221-222)

まず、名詞語幹と自動詞語幹が結合する例をあげる。(11)は自動詞「凍る」の主語「湖」が動詞にとりこまれているため、さらに新たな主語を追加することはできない。(12)はこれに対応する、「湖」を主語とした自動詞文である。

- (11)  $\gamma\text{ə}\gamma\text{-}\text{ə}\text{-}\text{qit-}\text{ə}\text{-}\text{tk}\text{ən}$   
lake-freeze-E-IPFV(3SG.S)  
「湖が凍っている」
- (12)  $\gamma\text{ə}\gamma\text{-}\text{ə}\text{-}\text{n}$                        $\text{qit-}\text{ə}\text{-}\text{tk}\text{ən}$   
lake-E-ABS.SG              freeze-E-IPFV(3SG.S)  
「湖が凍っている」

次の例では名詞語幹「頭」の所有者である「私」が主語に昇格し、新たな主語となっている。

- (13)  $\gamma\text{ə}\text{mm}\text{ə}$                $\text{t-}\text{ə}\text{-}\text{lot-}\text{ə}\text{-}\text{t}\text{ʃ}\text{əl-}\text{ə}\text{-}\text{tk}\text{ən}$ .  
I.ABS.SG              1SG.S-E-head-E-hurt-E-IPFV(3SG.S)  
「私は頭痛がする」
- (14)  $\gamma\text{ə}\text{mnin}$                $\text{law}\text{ət}$                        $\text{t}\text{ə}\text{ʃ}\text{əl-}\text{ə}\text{-}\text{tk}\text{ən}$ .  
My > 3SG              head(ABS.SG)              hurt-E-IPFV(3SG.S)  
「私の頭が痛む」

次に (iii) ならびに (iv) の例をあげる。次の (15) は名詞語幹 *plak* 「毛皮のブーツ」が動詞に抱合された例で、(16) はこれに対応する他動詞文である。(16) では「毛皮のブーツ」が絶対格の接尾辞をともなっているのに対し、(15) では語幹だけがとりこまれている。(17) では行為の受益者である「娘」が新たな目的語として出現している。

- (15)  $\gamma\text{ə}\text{mm}\text{ə}$                $\text{t-}\text{ə}\text{-}\text{plak-tavamjat-}\text{ə}\text{-}\text{tk}\text{ən}$ .  
I.ABS              1SG.S-E-boot-crumple-E-IPFV  
「私は毛皮のブーツを揉んで柔らかくした。」

(Natalia Voronova 1999, p.c.)

- (16) *yəmnan pələk-u t-ə-tavamjat-ə-tkə-na.*  
 I.INS boot-ABS.PL 1SG.A-E-crumple-E-IPFV-3PL.P  
 「私は毛皮のブーツを揉んで柔らかくした。」  
 (Natalia Voronova 1999, p.c.)
- (17) *əlla?-a ɲavakək pələk-tavamjat-ə-tkə-nin*  
 mother-INS daughter(ABS.SG) boot-crumple-E-IPFV-3SG.A > 3SG.O  
 「母が娘のために毛皮のブーツを揉んでいる」 (Lidiia Chechulina, p.c.)

アリュートル語では直接目的語以外の名詞項の抱合はあまり生産的ではない。例 (18) では道具を表す名詞「ナイフ」が動詞「切る」にとりこまれているが、動詞の屈折接辞を付加することはできず、動詞語幹のあとには行為の方法を表す接尾辞をつけ、補助動詞を伴って分析的に表している。

- (18) *yilɲən wala-svi-ta t-ə-nt-ə-n.*  
 string-E-ABS.SG knife-cut-ANAL 1SG.A-AUX-E-3SG.P  
 「私は革紐をナイフで切った」 (Lidiia Chechulina 2013, p.c.)
- (19) *yəmnan t-ə-svi-n ənn-ə-ʔən wala-ta.*  
 I.INS 1SG.A-E-cut-3SG.P fish-E-RDP knife-INS  
 「私は魚をナイフで切った」 (Kibrik et al. 2000)

場所を表す名詞が抱合される例は少なく、現在のところ「ふところ（毛皮のパーカの下）」という名詞一例しか見つかっていない。

- (20) *rattu-jp-i qəmla-ta.*  
 bosom-put-3SG.S.PFV marrow-INS  
 「(彼女は) パーカの下に (トナカイの) 骨髄を隠した」  
 (Nagayama 2020)
- (21) *tel rattu-ŋ ɣa-nv-ə-lin.*  
 there bosom-DAT RES-put.smt.into.smwh-E-RES.3SG.P  
 「(彼は熱した石を) ふところに突っ込んだ」 (Nagayama 2020)

アリュートル語では有生名詞は抱合されにくい。人間を表す名詞が抱合されることはほとんどない。筆者の調査協力者はいずれも次の文は非文であるとみなしている。

(22) ?yəmmə t-akka-n-naly-ə-n-kuww-at-av-ə-tkən.

I.ABS 1SG.S-son-CAUS-skin-E-CAUS-dry-CAUS-CAUS-IPFV

「私は息子に毛皮を干させた」

(Koptjevskaja-Tamm and Muravyova 1993: 307)

いっぽう、動物を表す名詞の抱合はきわめて限定的であるものの可能である。名詞語幹 *qura-*「家畜トナカイ」は動詞語幹 *t/nm-*「殺す」に抱合されることができ、動物を表す名詞の抱合は「家畜トナカイ」に限られており、ほかの名詞は抱合されることはできない。

(23) *mət-qura-nm-al-la*.

1NSG.S-domestic.reindeer-kill-VBL-PLUR

「私たちはトナカイを（大量に）屠殺した」

(Vladimir Nutayulgin 1998, p.c.)

(24) *muryənan mət-ə-nm-ə-la-n*

*qura-ŋa*.

1PL.INS 1NSG.A-E-kill-E-PLUR-3SG.P domestic.reindeer-ABS.SG

「私たちはトナカイを1頭殺した」 (Vladimir Nutayulgin 1998, p.c.)

## 5. 派生接辞

チュクチ語やコリヤーク語と同様にアリュートル語では接辞による語幹合成が発達している。接辞には接頭辞、接尾辞、接周辞がある。

### 5.1 動詞的な意味を持つ接辞

アリュートル語には動詞的な意味を持つ接辞、すなわち語彙的接辞がある。チュクチ・カムチャッカ諸語の語彙的接辞の数は少なく、たとえばチュクチ語およびコリヤーク語では動詞的な意味をもつ接辞は8ないし9である (Bogoras 1922: 811-813; 呉人徳司 2001: 84; Zhukova 1972; 呉人恵 1997)。

アリュートル語における動詞的な意味をもつ接辞は一例を除きすべて接尾辞である。これらの接尾辞には、チュクチ語やコリヤーク語と同様に、対応する動詞語幹を持つものもある。なお、チュクチ・カムチャッカ諸語における動詞的な意味を持つ接辞については Dunn (1999: 237) が Mithun (1984: 887) を引用しつつ、通時的には動詞に起源を持つものであろうと指摘しており、筆者もこの考えを支持する。

(25) アリユートル語の語彙的接辞と語幹の対応

接辞	動词语幹
-yili 「探す」	yity- 「～を探す」 vt.
-tva 「脱ぐ」	prə- 「～を脱ぐ、外す」 vt.
ta...-ŋ- 「作る」	tekə- 「～を作る」 vt.
-u 「食べる、飲む、(獣を) 殺す」	tu (-nu-) 「～を食べる」 vt.
-ŋal 「～をとりに行く」	
-ŋta 「～をとりに行く」	
-ŋərt 「～を捕獲する、狩る」	
-ru? 「(時間・季節が) 訪れる」	

他動词语幹「食べる」は語中では -nu- として現れるが、直接目的語を抱合することはできず、「～を食べる」を一語で言おうとするならば語彙的接尾辞を使って表す。

(26) \*yəmmə t-əvən?-ə-nu-tkən.  
 I.ABS 1SG.S-berry-E-eat-IPFV  
 「\* 私はベリーを食べる」( 非文 )

(27) yəmmə t-əvən?-u-tkən.  
 I.ABS 1SG.S-E-berry-eat-IPFV  
 「私はベリーを食べる」

動詞的な意味を持つ語彙的接頭辞について、Mithun (1997) は語族のことなる北米先住民言語において意味の類似が認められることを指摘している。

The inventory of lexical prefixes in Bella Coola is strikingly similar to a set of verb-like prefixes in Nisgha (Tsimshian) and to suffixes in Yup'ik (Eskimo) and Nootka (Wakashan). All show a high proportion of markers indicating presence or absence ('gather', 'acquire', 'catch', 'fetch', 'make', 'have', 'use', 'lack').

(Mithun 1997: 368)

上記の (25) で示したとおり、アリユートル語にも「～を捕まえる」「～を取ってくる」「～を作る」などの意味を持つ接辞があり、北米先住民諸語の

語彙的接辞との意味の類似が認められる。

## 5.2. 名詞的な意味を持つ接辞

アリュートル語には名詞的な意味を持つ一連の接尾辞があり、これらは主に名詞を派生するのに用いられる。これらが単独で動詞語幹にとりこまれて、動詞の項に相当するような機能を担うことはない。したがって、北米先住民諸語について報告されているような語彙的接辞とは性質が異なるものである。また、北米先住民諸語の中には 200 もの名詞的な意味を持つ語彙的接辞が報告されているというが (Mithun 1997)、アリュートル語では少数にとどまる。以下にその例をあげる。

### (28) 名詞語幹から名詞を派生する接尾辞

- a. *-july* 「容れもの」: *wala-july-* 「ナイフのさや」 < *wala* 「ナイフ」
- b. *-kv* 「覆い」: *arjina-kv-* 「レインコート」 < *arjin* 「雨」
- c. *-lwən* 「集合体」: *utt-ə-lwən* 「森」 < *utt-* 「木」
- d. *-mk* 「集合体、群」: *ra-mk-* 「トナカイ遊牧地」 < *ra-* 「家、ユルタ」
- e. *-surəm* 「縁、きわ」: *ʕinʔnʔ-ə-surəm* 「襟」 < *ʕinn-* 「首」
- f. *-tkən* 「先端」: *luʕ-ə-tkən* 「乳首」 < *luʕ-* 「乳房」
- g. *-tʕul* 「一片、(獣の) 肉」: *keŋ-ə-tʕul* 「クマ肉」 < *keŋ-* 「クマ」

なお、上述の名詞を派生する接尾辞には動詞語幹や形容詞語幹につきうるものもある。たとえば接尾辞 *-july* が動詞語幹から名詞を派生する場合、動詞によって表される行為が行われる場所を示す。以下に例をあげる。

- (29) a. *inakmi-july-* 「ナイフの柄 (つかむ場所)」 < *inakmi-* 「つかむ」 vt.  
b. *valʔaj-july-* 「椅子 (座る場所)」 < *valʔat-* 「座る」 vi.  
c. *inʔanʔnʔupat-july-* 「物干しの竿・ロープ」 < *inʔanʔnʔupat-* 「干す」 vi.  
(Nataliia Voronova 1999, p.c.)

ほかに動詞語幹から名詞を派生する接尾辞には次のようなものがある。

### (30) 動詞語幹から名詞を派生する接尾辞

- a. *-inaŋ* 「道具」: *milʕəp-inaŋ* 「ライター」 < *milʕəp-* 「火をおこす」 vi.
- b. *-nə (-nv-)* 「場所」: *anutva-nə* 「漁場」 < *anutva-* 「春を過ごす」 vi.



## 6. 名詞的な意味を持つ拘束形態素

5節で見た派生接辞のほか、アリュートル語には名詞的な意味を持ちながらも自立的な語幹として用いられることのない拘束形態素がある。いずれも接頭辞であり、5節で見た派生接尾辞と対照をなす。これらの形態素と相応する名詞語幹は、形式上、拘束形態素と明らかな一致を示すものがある一方で、形式上の一致をみないものもある。以下にその対応の例をあげる。

### (31) 名詞的な意味を持つ拘束形態素

拘束形態素	名詞語幹
a. iməl-「水」	miməl「水」
b. k-「子供」	un <sup>1</sup> un <sup>1</sup> u「子供」
c. ŋav-「妻、女」	ŋavʃan「妻」、ŋavəsŋən「女」
d. qəlik-「男」	ʃulʔa「男」
e. u-「木、薪」	utt-「木、薪」

これらのうち、「子供」を表す k- を除き、すべての拘束形態素は動詞派生接尾辞を直接つけて動詞語幹形成することができる。アリュートル語では名詞としての「子供」は un<sup>1</sup>un<sup>1</sup>u だが、コリヤーク語では kəmiŋən「子供」があり、k- がコリヤーク語の名詞語幹に起源をもつことは疑いがない。また、自立した名詞として用いられることはないが、「子供を産む」という動詞の語根はアリュートル語においても kəmiŋ である。

### (32) 動詞派生接尾辞 -at による動詞

- a. iml-at「(川が) 氾濫する」
- b. \*k-at- ただし kəmiŋ-at-「子供を産む」
- c. ŋav-at-「女になる」( 初潮を迎え、結婚できる年齢になること )
- d. qəlik-at「( 女が男と ) 結婚する、嫁ぐ」

形態素 iml は名詞語幹や派生接辞をつけて複合名詞や派生名詞などを作ることができる。この場合、自立的な語幹 miml は現れず、iml と miml は相補分布をなす。

### (33) iml を含む複合語

- a. iməl-kujŋ-「ひしゃく」 < kujŋ-「カップ」
- b. iml-arat「滝」 < arat-「落ちる」 vi.
- c. iməl-ruʃ-「(川が) 氾濫する」 < -ruʃ「(時間・季節が) 訪れる」 suff.

形態素 *u-* は派生接尾辞をつけて名詞や動詞を派生することができる。同じ派生接尾辞を名詞語幹 *utt-* にもつけられる場合があり、相補分布をなさない。母語話者の説明によれば、(34)b ではどちらの形式を用いても意味に大きな違いはないという。以下に例をあげる。

(34) *u-/ utt-* を含む派生名詞

- a. *u-ljən* 「森の手前のひらけた土地」
- b. *u-mk-* または *utt-ə-mk-* 「灌木の茂み」
- c. *utt-ə-lwən* 「森」

形態素 *u-/ utt-* は、名詞語幹の前につけて複合名詞を形成することができる。(35)b-c では *u-* と *utt-* の中間的な形式 *ut-* が現れている。(35)c-d では同じ名詞語幹 *qama-* 「皿」の前に *ut-/utt-* がついた複合名詞だが、より短縮された形 *ut-* を用いたほうが、本来の名詞の意味である「木製の」から離れており、語彙化が進んでいることがわかる。

(35) *u-/ut-/utt-* を含む複合名詞

- a. *u-msa-* 「薪、折れた枝」 < *msa-* 「折る、壊す」 vt.
- b. *up-pujy-* ( < \**ut-pujy-* ) 「手斧や槍などの柄」 < *pujy-* 「槍」
- c. *uq-qam* ( < \**ut-qama* ) 「樽、缶」
- d. *utt-ə-qama-* 「木製の皿」 < *qama-* 皿

形態素 *u-* はまた、動詞派生接尾辞や動詞語幹とともに出現する。

(36) *u-/ ut- / utt-* を含む動詞

- a. *u-ŋal-* 「薪を取りに行く」 < *-ŋal-* 「～を取りに行く」 suff.
- b. *u-ŋərt-* 「薪を作る、蓄える」 < *-ŋərt-* 「～をとる」 suff.
- c. *u-ŋtu-* 「森を抜ける」 < *ŋtu-* 「出る」 vi.
- d. *u-svitku-* または *utt-ə-svitku-* 「薪割りをする」 < *svitku-* 「切る」 vt.
- e. *ut-vif-* 「(体の一部が)痺れる」 < *vif-* 「死ぬ」 vi.

次に *qəlik-* 「男」<sup>3</sup> について検証する。この形態素は、上述 (32) の「結婚する」という動詞を除き、派生接辞がつく例はない。名詞語幹の前に現れて「男性の、雄の」を表すのが主な機能であるといえる。

(37) qəlik- を含む名詞

- a. qəlik-tumy- 「(女性から見た) 男性の兄弟」 < tumy- 仲間
- b. qəlik-ʕətʃ- 「雄犬」 < ʕətʃ- 「犬」
- c. qəlik-kuruv 「雄牛」 < kuruv 「牛」(ロシア語 korova からの借用)

なお qəlik- が「死ぬ」という語幹につく例があるが、動詞語幹につく例はこの一例しか確認できていない。

(38) qlik-viʃ- 「夫に先立たれる」 < viʃ- 「死ぬ」 vi.

次に ηav-「妻、女」について検証する。文中で名詞項として用いられる場合、必ず接尾辞を伴う。語根は共通だが、接尾辞によって意味が細分化され、「妻」「女」「少女」などを表す。これらの接尾辞の起源は明らかではないが、数や格を表す接尾辞がつくときには、これらの接尾辞の後につく。

(39) ηav- を含む名詞の単数・複数の対応

- a. ηavʃan 「妻」 ηavʃan-uwwi 「妻たち」(複数)
- b. ηavəʃə-n 「女」 ηavəʃə-uwwi 「女たち」(複数)
- c. ηavəsqat-pil<sup>l</sup> 「少女」 ηavəsqat-pil<sup>l</sup>-ηaqu 「少女たち」(複数)

「女」を表す形態素 ηav- は上述の「男」と同様に、名詞語幹の前について「女の、雌の」という意味の名詞を作ることができる。なお、ηav は名詞の後につく例もある。アリユートル語では修飾要素は主要部の前に現れるので、(40)a-b では ηav- が後部要素を修飾しており、c-d では ηav が主要部となっている。

(40) ηav + 名詞の例

- a. ηav-akək 「娘」 < akək 「息子」
- b. ηav-ʕətʃ- 「雌犬」 < ʕətʃ- 「犬」
- c. ənpə-ηav 「おばあさん」 < ənpə- 「古い、年老いた」
- d. sosəva-ηav 「コリヤーク人の女」 < sosəv 「コリヤーク人の男」

アリユートル語では一般に、人間を表す名詞は抱合されにくい、「妻、女」を表す形態素はいくつかの動詞語幹にとりこまれることができる。ただし、これらをほかの無生物名詞の抱合と同列に扱うことができるかどうかは、さ

らなる検証が必要である。

(41) *ŋav* + 動詞の例

- a. *ŋav-ə-nʲnʲu-*「(男性が)求婚する」 < *t/nʲnʲu-*「見張りをする」 vi/vt
- b. *ŋav-niŋlat-*「妻を捨てる」 < *t/niŋlat-*「放る、投げ捨てる」 vt
- c. *ŋo-viʃə-*「妻に先立たれる」 < *viʃə-*「死ぬ」 vi

抱合の例としてテキストから確認できたのは以下の2例である。いずれも筆者の調査した中では高齢の調査協力者による民話の語りから得られた例である。これらの例から考えられるのは、以前は比較的生産的に行われていた人間を表す名詞の抱合が、現在では使用の範囲が狭まってきているという可能性である。さらなる検証を必要とする。

- (42) *pəsa*                      *m-ə-ŋav-ə-n-makla-v-ə-k*  
for.the.present    OPT.1SG.S-E-wife-E-CAUS-visit-CAUS-E-1SG.S  
「さて、まずは妻を両親のところへ連れて行こう」 (Nagayama 2020)

- (43) *pəsa*                      *tingaq*    *ana*            *ŋetaŋ*  
for.the.present    well            maybe    then  
*t-ə-ta-ŋav-ə-n-ret-at-ə-lqi.*  
1SG.A-E-FUT-wife-E-CAUS-go.home-CAUS-E-INC  
「それでは私は妻を家へ連れて帰ろう」 (Mariia Chechulina 2001, p.c.)

最後に拘束形態素 *k*-「子供」について検証する。チュクチ語・コリヤーク語・アリュートル語では「子供」を表す名詞語幹に2系統あり、言語や方言によっていずれか一方しか使わないものと、両方を使うものがある。

(44) 「子供」

- Chukchi. *nenenə* (Moll and Inenlikey 1957/2005: 98), *kmiŋən* (ibid: 157)  
Koryak. *kmiŋən* (Zhukova 1967)  
Kamenskoe dialect. *kmiŋən* (Bogoras 1917)  
Alutor                      *unʲunʲu, unʲəʔu* (Nagayama et al. 2019)  
Lesnaya dialect.        *kmiŋən, unʲunʲu* (Anna Bogoiablenskaia 2017, p.c.)  
Karaga dialect.        *nʲenʲeʔu* (Maria Nikiforova, p.c.)

ここで注目したいのは、アリユートル語で「子供」を表す拘束形態素 *k-* と、それに相応する意味を持つ名詞語幹 *un<sup>1</sup>un<sup>1</sup>u* とが一致しないことである。アリユートル語の名詞語幹 *un<sup>1</sup>un<sup>1</sup>u* は、コリヤーク語の *kmiŋən* とは異なり、派生接尾辞をつけることができない。そのかわり、独立した名詞としては使われない語幹 *kmiŋ-* に動詞派生接尾辞 *-at* をつけて「子供を産む」という動詞を作ることができるのはすでに (32) で確認したとおりである。歴史的にはアリユートル語においても *kmiŋ-* が名詞語幹として使われていたのが、何らかの理由により別の語幹 *un<sup>1</sup>un<sup>1</sup>u* に取って代われ、「子供を産む」という動詞だけがその痕跡として残っている可能性がある。

次に拘束形態素 *k-* が語幹としての性質をどれだけ保っているかを検証しよう。拘束形態素 *k-* は名詞語幹につく派生接尾辞を取ることが可能であるが、あまり生産的ではない。

(45) *k-ə-july* 「女性器 (子供の容れもの)」 < *-july* 「容れもの」

また、拘束形態素 *k-* は動詞語幹の前に現れることができるが、いずれの例においても *k-* を *un<sup>1</sup>un<sup>1</sup>u* ないし *kmiŋ-* に置き換えることはできない。

次の (46) は *k-* が自動詞語幹につく例である。

(46) *k-* + 自動詞

a. *k-ə-tirŋat-* 「(人の) 子供が泣く」 < *tirŋat-* 「泣く」 vi

b. *k-ə-ratavat-* 「子と一緒に留守番する」 < *ratavat-* 「家で留守番する」 vi

一般に名詞語幹と自動詞語幹によって形成される複合語では名詞語幹が自動詞の主語となっていることが多いが、ここでは「子供」は自動詞の主語ではなく、主語は補助動詞に示されているとおり「私」である。日本語には訳しづらいが、「私は子供が泣いている状態にあった」という意味となる。

(47) *qəvətte, məri am-ə-k-tirŋat-a t-it-ə-tkə.*  
*I, don't know because only-E-child-cry-ANAL 1SG.S-AUX-E-IPFV*  
 「知らないよ、(私の) 子供が泣いていたから」 (Nagayama 2004)

次の (48) は *k-* が他動詞語幹の前につく例で、*k-* は他動詞の直接目的語を表す。

(48) k- +他動詞

- a. k-ʔimti-「子供をおんぶする」 < ʔimti-「背負う」 vt
- b. k-ə-nm-at-「墮胎する」 < t/nm-「殺す」 vt
- c. k-ə-nʲnʲu-「子守りする」 < t/nju-「見張る」 vt
- d. k-ə-lluvat-「授乳する」 < t/lluvat-「乳を飲ませる」 vt
- e. k-ə-piri-「子供を腕に抱く」 < piri-「腕に乗せて抱える」 vt

k- が他動詞語幹に付加された例を以下に示す。(49) および (51) は「抱合」の例だが、これに対応する他動詞文 (50) および (52) では直接目的語として unʲunʲu が用いられる。

(49) ʔəmmə t-ə-k-ʔimti-tkən.

I.ABS 1SG.S-E-child-carry-IPFV

「私は子供をおぶっている」(抱合) (Lidiia Chechulina 2013, p.c.)

(50) ʔəmnən t-imti-n unʲunʲu

I.INS 1SG.A-carry-3SG.P child(ABS.SG)

「私は子供をおぶっている」(他動詞文) (Lidiia Chechulina 2013, p.c.)

(51) ...maŋin k-ə-nm-al-la-tkə-t winʲva

... which child-E-kill-SUFF-PLUR-IPFV-3NSG.SG secretly

「密かに墮胎したものたちは(死後に罰を受ける)」(Nagayama 2015)

(52) winʲva na-nm-ə-tkə-na unʲunʲu-w...

secretly INV-kill-E-IPFV-3PL.P child-ABS.PL

「彼らは密かに子供を殺した(墮胎した)」(Nagayama 2015)

## 6. おわりに

以上をまとめると、アリュートル語の名詞的な意味をもつ拘束形態素は、派生接尾辞を付加して名詞や動詞の語幹を形成するという点では語幹としての機能を保ちながらも、名詞項にはなりえないという点では接辞と共通しており、名詞と接辞との中間的な性質をもつといえる。これらの性質を、名詞語幹や名詞的な意味を持つ接尾辞と比較すると次の表ようになる。

表 1 名詞および接辞の語形成上の特徴

	名詞語幹	ŋav- 「妻」	u- 「木」	k- 「子」	その他の名詞的意味を持つ接尾辞
格接辞の添加	Yes	No	No	No	No
動詞派生接尾辞添加	Yes	Yes	Yes	No	No
名詞派生接尾辞添加	Yes	Yes	Yes	No	No
動詞語幹への抱合	Yes	Yes	Yes	Yes	No
複合名詞化	Yes	Yes	Yes	No	No
語幹に対する位置	前/後	前/後	前	前	後

ただし、「抱合」と共通する例をどのように解釈すべきか、まだ課題が残る。アリュートル語では一般的には有生性が高い名詞語幹は抱合されないが、前節で見た通り「妻」および「子」を表す拘束形態素が抱合と類似する構文に出現する。しかし生産性は著しく低い。これを抱合の特例とするのか、あるいはこれらの拘束形態素が接頭辞化しているとするかを判断するには、さらに詳しい調査が必要である。

### 【注】

1. 本稿は 2014 年 2 月 21 日に開催された International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages (国立国語研究所) における口頭発表 Polysynthesis in Alutor (Yukari Nagayama) に基づく。発表に有益なコメントをくださったシンポジウム参加者ならびに調査に協力していただいた研究協力者の皆様に感謝の意を表す。なお、本研究は主に次の助成を受けたものである：科研費基盤研究 (C) 「消滅の危機に瀕する古アジア諸語の再活性化のための辞書編纂と語彙データベース構築」(課題番号 25370453, 代表：永山ゆかり)、基盤研究 (C) 「シベリア先住民族諸言語のテキストコーパス構築と文法及びその構造的変化に関する研究」(課題番号 19K00564, 代表：長崎郁)、基盤研究 (B) 「シベリア先住民諸語の方言に関する基礎的研究と語彙データベース構築」(課題番号 20H01260, 代表：永山ゆかり)。

2. 本稿で用いる略号は次のとおりである。

A agent, ABS absolutive case, ANAL suffix for analytical forms of a verb, AUX Auxiliary verb, CAUS causative, E epenthesis, FUT future, DAT dative case, DIM diminutive, INC inchoative, INS instrumental case, INV inverse marker, IPFV imperfective, NSG non-singular, OPT optative, P patient, RDP reduplicated morpheme, PL plural, PLUR pluralizer, SG singular, VBL verbalizer, 1 first person, 2 second person, 3 third person, - morpheme boundary.

3. 数詞の qəlikkə 「20」がこの形態素と関連することが以前から指摘されており、歴史的な関連を否定するものではないが、現代では意味も機能も異なることから、ここでは詳しく論じない。

### 【参考文献】

- Bogoras, Waldemar (1917/1974) *Koryak Texts*. (Publications of the American Ethnological Society, 5.) New York: AMS Press.
- Comrie, Bernard and Maria Polinsky (eds.) (1993) *Causitives and Transitivity*. Philadelphia: John Benjamins.
- Dunn, Michael (1999) *A Grammar of Chukchi*, PhD dissertation, Australian National University. doi: 10.25911/5d77842288837
- Haiman, John, Joan Bybee, and Sandra Thompson (eds.) (1997) *Essays on Language Function and Language Type*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kibrik, A.E., S.V. Kodzasov, I. A. Muravyova (2004) *Language and Folklore of the Alutor People* (ELPR publication Series A2-042). Suita: Osaka Gakuin University.
- Koptjevskaja-Tamm M. and I. A. Muravyova (1993) Alutor causitives, noun incorporation, and the Mirror Principle. In: Comrie and Polinsky, eds. (1993). 287–313.
- 呉人徳司 (2001) 『チュクチ語動詞派生形態論』京都大学大学院文学研究科博士論文 (未公刊) .
- 呉人恵 (2001) 「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」『環北太平洋の言語』7. 101–123.
- Mithun, Marianne (1984) The Evolution of Noun Incorporation. *Language*. Vol. 60. No.4: 847–894. doi: 10.2307/413800.
- Mithun, Marianne (1997) Lexical affixes and morphological typology. In: Haiman, John, Joan Bybee and Sandra Thompson (eds.). 357–372.



- Moll, T. A. and P. I. Inenlikey (1957/2005) *Chukotsko-russkiy slovar*. Vtoroe izdanie, ispravlennoe i dopolnennoe. [Chukchi-Russian dictionary. Second edition.] St. Petersburg: Prosveshchenie.
- Nagayama, Yukari (2015) *Materials of the Language of Nymylan-Alutor*. Vol.1. (Materials of Siberial Languages 2). Sapporo: The working group of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B) «A Study of Digital Archive Environment and Language Documentation for Minority Languages in North-East Eurasia».
- Nagayama, Yukari (2020) *Materials of the Language of Nymylan-Alutor*. Vol.2. (Materials of Siberial Languages 7). Kushiro: The working group of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B) «Typological Study for Syntactic Structures of Indigenous Languages of Siberia».
- Nagayama, Yukari, Vladimir Nutayulgin, Lidia Chechulina (2019) *Nymylan-Russian Dictionary*. Part 2. (Materials of Siberial Languages 5). Sapporo: The working group of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B) «Typological Study for Syntactic Structures of Indigenous Languages of Siberia».
- Zhukova, A. N. (1967) *Russko-koriakskiy slovar* [Russian-Koryak Dictionary]. Moscow: Soviet Encyclopedia.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika koriakskogo iazyka: Fonetika i morfologiya* [Koryak grammar: Phonetics and morphology]. Leningrad: Nauka.

### 【要旨】

アリユートル語（チュクチ・カムチャッカ諸語）の名詞的意味をもつ拘束形態素について、語形成の観点からその特徴を検証する。「女」「子供」「木」などの名詞的意味をもつ拘束形態素はこれに対応する意味を持つ自立的な名詞語幹をもつ。本稿ではこれらの拘束形態素が語幹としての性質を保ちつつも、文法化が進行していることを示し、これらの拘束形態素が名詞語幹と語彙的接辞との中間的な存在であることを主張する。

Noun-like Prefixes in Alutor

NAGAYAMA Yukari